鈴木貫太郎内閣成立、その日大和は沈んだ

平成23年4月2日　高根台公民館

硫黄島を攻略した米軍は、息もつかせずに沖縄へ進攻して来ました。昭和二十年三月二十六日、沖縄本島の西側にある慶良間列島に上陸して来たのです。翌日の二十七日夜には、関門海峡に一千個の機雷が投下され、長距離爆撃機B29による機雷作戦も始まりました。米軍は「飢餓作戦」、「日本を飢えさせる作戦」と名付けていますが、船が沖合を通れば潜水艦、艦載機に狙われ、沿岸では一万二千個に達した機雷の恐怖。日本列島は完全に封鎖され、まさに窒息寸前になっていったのです。

米軍の沖縄本島上陸作戦は四月一日の朝、嘉手納海岸の猛烈な艦砲射撃で始まりました。第五艦隊長官スプルーアンス大将率いる艦船千三百十七隻、艦載機千七百二十七機、動員兵力四十五万、上陸部隊は十二万という大軍です。迎え撃つ日本軍は、牛島満中将を軍司令官とする第三十二軍を中心に陸軍部隊六万七千、海軍の陸戦隊八千。それに防衛召集をした師範学校や中学校、女学校の上級生など、「県民部隊」とも言うべき現地義勇兵が二万五千。全部で約十万人ですが、参謀本部にとって何より必要なのは、秋ごろに予想される米軍の本土来攻までに、本土の決戦態勢を整えることでした。ですから、この沖縄戦の位置付けも、出来るだけ米軍を食い止め、時間を稼ぐことだったのです。第三十二軍も、それまでのような水際撃滅戦法ではなく、拠点陣地に拠って出血持久作戦をとりましたから、米軍の上陸は、米兵が「エイプリル・フールか」と言うほど、あっけないものでした。出血らしい出血もなく、その日のうちに五万人が上陸して進撃していったのです。

小磯国昭内閣が総辞職したのは、沖縄戦が激化した四月五日でした。きっかけとなったのは、「繆斌工作」と言われる対重慶和平工作です。国民党の中央委員だった繆斌は、南京の汪兆銘政権に参加して立法院の副院長になっていましたが、日本の敗色が濃くなってくると、重慶との連絡を試み、それが発覚して閑職に左遷されていました。小磯は、まず重慶の蒋介石との間に話し合いをつけ、その蒋介石の斡旋によって米英との和平に持ち込む。こういう構想を描いていた小磯首相とすれば、とにかく重慶とつながっているのは繆斌ルートだけであり、繆斌を飛行機で東京に呼び寄せると、三月二十一日の最高戦争指導会議に「繆斌工作」を提案したのです。

しかし、この工作を進めるには、蒋介石に誠意を示すためにも、前提として南

京政権を解消しなければなりません。主席の汪兆銘は前年十一月、名古屋で病死していましたが、政策の根本的な変更であり、何よりも日本が政権を作っておきながら、それを潰すのはといった、国際信義の問題もありました。重光葵外相はじめ陸海軍は反対しましたし、昭和天皇も四月三日、小磯に繆斌の帰国を命じられ、「繆斌工作」は挫折したのです。繆斌の重慶側の接触相手は、特務機関幹部の戴笠だったと言われますが、戴笠が終戦直後に飛行機事故で死亡すると、繆斌も直ちに「漢奸」、裏切り者として処刑されています。重慶中枢部が「繆斌工作」に関与していて、その暴露を防ぐため素早く処刑したともとれますが、日本の敗北が確定的になっている時です。蔣介石が日本との単独講和に応ずる意思を持っていたとは、到底考えられませんから、戴笠の狙いは、やはり日本と南京政権との離間にあったのではないでしょうか。

そして、「繆斌工作」に躓いた小磯が辞職の決意を固めたのは、陸軍大臣兼務の要望を陸軍からすげなく拒否されたためだったのです。陸軍は本土決戦に備えて全国を東西二つの軍管区に分け、東日本の第一総軍司令官に陸相の杉山元元帥、西日本の第二総軍司令官に教育総監の畑俊六元帥、陸相の後任には阿南惟幾大将を充てる人事を決め、四月八日付で発令する予定でした。小磯が「繆斌問題」で天皇から呼び出された三日、この人事を内奏するため参内していた杉山陸相から、「ちょうどいい機会だから、君の了解を得ておきたい」と、告げられたのです。陸相という、戦時内閣で一番要になる閣僚の更迭を、首相には一言の断りもなく決め、しかも先に内奏するというのは、順序も違っていますし、陸軍が首相をいかに軽く見ていたかを物語っています。

実は陸軍は、弱体な小磯内閣をすでに見限っていたのです。陸軍省軍務課は三月三十日、「小磯内閣退陣指導要領」、「新内閣組織要領」、「陸軍現役軍人二大命降下セル場合ノ措置要領」。こういう三つの文書を上層部に提出し、後継首相には参謀総長の梅津美治郎大将か畑元帥のいずれかを希望していました。小磯は、そんなことは全く知りません。陸軍大将とはいえ、予備役の悲しさ。陸軍がやると言っていた「レイテ決戦」が、知らない間に「ルソン決戦」に変更されてしまい、参謀本部戦争指導班長の種村佐孝大佐が「大本営機密日誌」に、「小磯総理が両総長から、作戦企図に関しては肚を割って何もきいていないことがわかる。これでは総理大臣として適切な戦争指導は出来なかろう。お気の毒だという感を深くした」。こう書いているほどでした。

小磯も、これではどうにもならないと思ったのでしょう。天皇に願い出て三月十六日、天皇の特旨により大本営の協議に加わることが許されたのです。日露戦争の時の桂太郎首相以来、四十年ぶりのことでしたが、昭和の陸軍では、この程度で状況が変わるはずもありません。作戦指導への参加はおろか、作戦情報さえろくに得られません。それは小磯自身、軍務局長、陸軍次官時代、政府に対して

自分もそうやって来たのですから、陸相を兼務しなければダメだということは、誰よりもよく知っていたのです。

そこで四月四日、杉山が陸相人事の承認を求めてくると、「陸相には僕がなろう。参謀総長、教育総監と相談して、至急返事をしてほしい。承認されない場合は、内閣総辞職をする決心だ」。こう言って、精一杯決意のほどを示したのですが、陸軍は小磯退陣を織り込みずみなのですから、待っていたようなものです。夜、杉山が届けてきた返事は、「三長官とも予備役の現役復帰、陸相就任は絶対に承認出来ない」。小磯は、すぐ内大臣の木戸幸一に辞意を伝えましたが、その際「これからは大本営内閣、戦争指導内閣でなければいけない」と言い残しています。確かに小磯とすれば、戦局の変化を知ることも出来ず、事態に即応出来ないままでは、首相の重責はとても勤まらないと、身に染みて感じていたのでしょう。

しかし、この小磯の言葉は、大変な重みを持っていました。陸軍が「本土決戦を控えて、後継首相は現役軍人でなければダメだ」と言い出せば、木戸の考えていた「終戦内閣構想」は、根底から崩れてしまうのです。木戸と四人の重臣、元首相の近衛文麿、岡田啓介、平沼騏一郎、若槻礼次郎は、すでに退役海軍大将鈴木貫太郎を後継首相とすることで、意見の一致を見ていました。重臣の結束で東条英機内閣を倒した後、四人は定期的に集まって終戦への道を模索していましたが、最初に鈴木の名前を出したのは平沼です。東京大空襲のあった三月十日のことで、話題の中心は悲惨な空襲被害でしたが、突然平沼が「もう小磯内閣では駄目ですね。後は鈴木貫太郎さんに頼んだらどうです」と、言うのです。

鈴木内閣へ向けて猛然と動き出したのが、海軍兵学校で鈴木の一期後輩の岡田啓介です。回顧録に「私はこんどは是非とも鈴木を出して、いよいよ最後の決断をしてもらおうと思った」。こう書いていますが、岡田は個別に重臣の考えを纏めていきました。二十七日、平沼に「小磯の次に鈴木を首相に、阿南を陸相とする内閣を作ったらどうか」と話すと、平沼は勿論賛成です。岡田が阿南陸相案を出したのは、二・二六事件で襲撃された際、義弟で首相秘書官の松尾伝蔵陸軍大佐が岡田と誤認されて射殺され、それで岡田は間一髪難を逃れたわけですが、その松尾の娘婿が当時参謀本部参謀で戦後伊藤忠の副会長をされた瀬島龍三中佐でした。瀬島さんから陸軍の情報をいろいろ聞いていましたから、阿南の信望が厚いこと、陸軍が次に陸相に出してくるのは阿南に違いないと読んだからです。海軍出身の鈴木内閣を成立させるには、最大の難関は陸軍であり、陸軍も阿南を考えていたところへ、まずこの陸相人事の一致が大きかったのです。

近衛が「木戸の意向はどうか」と言うので、岡田が訪ねると、「次の内閣で終戦を。それには、陛下が腹蔵なくお話し合いになれる内閣を作ることだ」。そう考えていた木戸も、鈴木が長年侍従長を務め、天皇の信頼が厚いことを知ってい

ますから、大賛成です。木戸は「ともかく、ものがうまくゆく時、つまり鈴木総理、阿南陸相が生まれるようなことは、いくら事前に計画しても、そうたやすく出来るものじゃない。鈴木内閣誕生は、通俗な言葉だが、天の助けと言うべきではないかな」と、話しています。

それにしても、当時七十七歳、なぜ高齢の鈴木だったのでしょうか。海軍大将とはいっても、昭和四年一月に侍従長になった時、十六年も前に予備役になっており、二・二六事件で襲撃されて瀕死の重傷を負ってからは、枢密院の顧問官、副議長、議長と高位高官ではあるが、まあずっと閑職で過ごしてきた人です。鈴木を引っ張り出した人たちは、一口でいえばこう考えたのです。七年余りも侍従長として奉仕し、天皇の信頼が極めて厚い。しかも意志強固で、それだけに天皇の意図を体して誠心誠意、どんなに難しい事だろうとその実現に努めるに違いない。天皇が終戦を急がれていることは明らかで、もはや終戦すべき最後の段階にきている。しかし、一方で陸軍は「本土決戦、一億玉砕」を叫んでおり、表面的には戦争継続を装う必要がある。それには、和平傾斜の疑いをかけられることのない人物、軍部から警戒されない人物でなければならない。その点、鈴木は軍人出身であり、政治的な行き掛かりもない。人間的にも、まさに将に将たるの重量感に富んでおり、行政面に有能な補佐官をつければ、国民一般の信望を集めるのにも適当だ。

こうなると、木戸の気懸りは小磯の言葉です。四月五日に小磯内閣が総辞職すると、木戸は重臣会議に先立って、陸海軍の首脳に統帥と国務との統合について見解を質したのです。杉山、梅津、海軍大臣の米内光政、軍令部総長の及川古志郎と、全員が小磯の意見には否定的で、「この重大時局に一人で何役も兼ねること、つまり、首相が軍部大臣を兼務することは困難だ。戦争遂行には、今の形が一番良いように思う」との答えです。木戸はこれで、現役軍人でない鈴木が首相になるのは可能だ、との判断を得たわけです。「それに好都合なことに、一番難問の陸相には阿南君が来ることがわかっていた。彼は侍従武官を四年間やっており、陛下のお気持ちも十分知っている。杉山からその旨、内密に伝えられていたので、私の重臣会議に臨む肚は決まったのだ」と言っています。

後継首相を選ぶ重臣会議は、五日午後五時から宮中で開かれました。出席者は木戸のほか、近衛、岡田、若槻、平沼、広田弘毅、東条の元首相六人、それに枢密院議長の鈴木です。海軍大臣の米内と朝鮮総督の阿部信行は、現職にあるため召されませんでした。まず、口火を切ったのは東条です。陸軍の希望する陸軍内閣に持って行こうと、「誰にするかという前に、戦争をやるのか、無条件降伏でもよいのか、それを決めてはどうか」。こう迫ったため、会議はいきなり緊迫しました。和平を口にでもしようものなら、たちまち東条を通じて憲兵に知られ、どんな弾圧が来るかわかりません。東条は、これで和平派の口を封じようとした

のですが、平沼が「この際は、戦い抜く人ならざるべからず、打切り和平論者は推薦する能わず」と応じます。岡田は戦後の東京裁判で、この心とは正反対の平沼発言を注釈して、「それは平沼の、その鈴木がなれば早く平和になることができるという考えを、公に言ったならば、平和もきませんし、鈴木の組閣はできないことになるのであります」と、証言しています。

会議は「戦争継続」の建前を認めた上で、現役に限定せず、軍人を選ぶという方向をまず確認しました。すかさず、近衛が「今迄の行きがかりのない人がいいだろう」と釘をさし、東条、梅津を排除すると共に、鈴木指名への道を開きます。そして、平沼が「先の条件に合致する軍人の重臣として、国民の信頼をつなぐ者は鈴木である」と、鈴木の名前を出したのです。近衛、若槻は直ちに同意しましたが、鈴木本人は強く辞退しました。「軍人が政治に出るのは、国を滅ぼす基だと考えている。ローマの滅亡しかり、カイザーの末路、ロマノフ王朝の滅亡またしかり。だから、自分は政治に出ることは、自分の主義上から出来ない。耳も遠いし、お断わりしたい」

東条は、会議が意図する方向からそれて焦っていました。自分が政治に出たことは棚に上げて、鈴木の信条を讃め、「敵の本土進攻が予想される段階では、現役軍人でなければならない」と強調し、畑元帥を指名します。木戸はここで「国内が戦場となろうとしている際だからこそ、一層政治の強化が必要で、国民の信頼ある、どっしりした内閣を作らなければならない」。暗に、陸軍では国民の信頼は得られないと、畑を斥け、鈴木を強く推したのです。木戸の公然たる挑戦に興奮した東条は、露骨な威嚇の捨て台詞を口走り、木戸、岡田などとの間に有名な論戦を展開します。

「木戸日記」から再現しますと、東条が「国内が戦場とならんとする現在、余程御注意ならないと、陸軍がそっぽを向く虞れあり。陸軍がそっぽを向けば、内閣が崩壊すべし」。木戸の「陸軍がそっぽを向くといふことは此の際重大なるが、何かきざしなり、予感なりがありや」に、東条は「ないこともない」。木戸が「先程も申せし通り、今日は反軍的な空気も相当強し。国民がそっぽを向くと云ふこともあり得べし」と切り返し、岡田も「此の重大時局大国難に当り、苟も大命を拝したるものに対しそっぽを向くとは何事か。国土防衛は誰れの責任か、陸海軍にあらずや」。こうダメを押すと、東条は「其の懸念あるが故に、御注意ありたしと云へるなり」。すると若槻が「今日其の様な懸念があっては大変で、苟も日本国民たる以上、そんなことは毛頭ないと信ずる」と応じます。日頃、建前論で相手を沈黙させてきた東条が、逆に完全に抑え込まれています。戦況の深刻化が、皮肉なことに陸軍の横車を押し返す状況を生んだのです。

重臣会議は、鈴木推薦を決定して午後八時に終わりましたが、木戸は鈴木をもう一度説得した上で、後継総理として鈴木を奏上しました。鈴木がお召で参内し

たのは夜十時過ぎです。侍従長の藤田尚徳によると、この人も海軍で鈴木の後輩ですが、天皇は「卿に組閣を命ずる」と言ったまま、黙っておられます。いつもなら三ヵ条の注意、「憲法の条規を遵守するよう、外交は慎重にし無理押ししないよう、国内の経済についても急激な財政政策をとらないこと」。こう続けるのが慣例なのに、天皇は黙っています。藤田は「これは無条件で組閣を命じられたのだのなあ」と、感じたそうです。灯火管制のほの暗い御学問所、静まりかえる中で、鈴木は深々と一礼して答えました。「聖旨のほど、畏れ多く承りました。ただこのことは、何とぞ拝辞の御許しを御願い致したく存じます。鈴木は一介の武弁、従来何の政見を持ち合わせませぬ。『軍人は政治に干与せざるべし』の明治陛下の御聖諭をそのまま奉じて参りました。何とぞ、この一事は拝辞の御許しを願い奉ります」

ところが、当時四十三歳の昭和天皇はニッコリして、「鈴木の心境はよくわかる。しかし、この重大な時に当たって、もう他に人はいない。頼むから、どうか枉げて承知してもらいたい」と、言われたのです。藤田は「頼むから、枉げて」に、「異例中の異例のことだ。並大抵のことじゃないと思った」と言います。しかも鈴木が、「耳が遠くて、陛下のお声が聞こえない時もあるでしょうから」と言うと、天皇は「耳が遠くてもよい、声が聞こえなくてもよい」とまで言われたのです。天皇の鈴木に対する信頼は、それほど厚かったし、藤田は「鈴木さんこそ、陛下の持ち駒として唯一の人であった」と、言っています。

こうして四月七日、終戦の際の「聖断」お膳立ての内閣が成立したわけですが、早々に激震に襲われたのです。まず、鈴木が大命を受けた五日、ソ連は日ソ中立条約を延長しないと通告してきました。まだ一年の猶予があるとはいえ、条約は来年四月には自動的に効力を失うことになり、ソ連の敵対的な姿勢が明らかになってきました。しかも七日には、世界に誇る戦艦「大和」が、九州奄美諸島の徳之島西方海上で撃沈されたのです。それは、帝国海軍の実質的な終焉を物語るものであり、連合艦隊長官、軍令部長として海軍と共に歩んできた鈴木の門出には、衝撃的な出来事でした。

戦艦「大和」の名前が、戦後六十六年経った今もなお、私たちの心に深く刻みこまれているのは、世界最強、最大の戦艦でありながら、航空機の掩護もなく、片道燃料だけで沖縄に突っ込んで、陸上砲台にする。この海上特攻作戦の悲壮さにあるのでしょう。全長二百六十三㍍、最大幅三十八・九㍍。基準排水量六万二千㌧、速力は二十七ノット。艦底、艦の底から最上甲板までが高さ二十㍍。六階建てのビルの大きさで、冷暖房装置まで備え「大和ホテル」と言われたものでした。しかし、「大和最」大の特徴は、何といっても九門の四十六㌢主砲です。世界で四十六㌢砲は「大和」と姉妹艦の「武蔵」だけで、砲身、大砲の長さは実に二十一㍍。東京駅から仰角四十五度で発射したとすると、その砲弾は富士山の二倍の高さを

飛んで四十一キロ先、大船に着弾します。大砲の口径は四十センチ砲の一割一分五厘増に過ぎませんが、威力となると四割二分増。三十キロ先の、厚さ四十三センチの鉄鋼板を貫いたといいます。しかも、砲弾や爆弾、魚雷が命中しても、誘爆に耐えられるよう、艦底と砲塔直下の火薬庫の間を三重にして、舷側防御、艦の横の鉄鋼板は厚さが二十七センチ。「不沈艦」と豪語したのも頷ける、まさに、日本海軍の造艦技術の粋と総力を結集したものでした。

大正十一年のワシントン海軍軍縮条約で、日本の戦艦は「五・五・三」、米英の五に対して三と六割に制限され、主力艦の建造休止期間も、昭和五年のロンドン会議でさらに五年間延長されていました。満州事変、日本の国際連盟脱退などで日米間の緊張が高まり、戦艦の老朽化も年々進行していきます。海軍は新戦艦を建造するため、ワシントン条約廃棄の方針を決め、昭和九年十二月、アメリカに通告したのです。二年後には条約は効力を失い、十二年から自由建艦時代に入るわけですが、軍艦の数では国力の差で対抗出来ません。そこで新戦艦は、戦闘能力でアメリカ海軍を圧倒すること、世界最強の戦艦であるためには四十六センチ砲を必要としたのです。この大口径砲を備えるには、船体が小さいと砲撃のたびに激しく振動してしまい、安定させるためには艦の幅を広げるなど、それに見合った規模が必要でした。アメリカ海軍が、太平洋艦隊、大西洋艦隊の二つの艦隊を効率的に運用しようとすれば、どうしても幅三十三・五メートルのパナマ運河を通らなければなりません。四十六センチ砲を搭載すれば運河が通れませんから、アメリカの戦艦は四十センチ砲になるはずだ、との読みもあったのです。

「大和」は昭和十二年十一月、呉の海軍工廠で起工されましたが、その建造は極秘でした。総建造費は一億三千七百八十万二千円、大学出の初任給が月額七十円の時代です。普通の四十センチ砲の戦艦として予算を計上し、足りない分は架空の軍艦を造ることにして、その予算を充てたんだそうです。連合艦隊長官として戦死した山本五十六が航空本部長になったのは昭和十年暮れで、「航空優先論」を主張しましたが、海軍上層部は「艦隊決戦、大艦巨砲主義」でした。山本は「大和」の設計責任者の所へ来て、こう言ったというのです。「どうも水を差すようで済まんですがね。君たちは一生懸命やっているが、いずれ近いうちに失職するぜ。これからは海軍も空軍が大事で、大艦巨砲は要らなくなると思う」。「大和」、「武蔵」の建造費は総額三億円を超えましたが、開戦当初無敵を誇った海軍のゼロ戦、零式艦上戦闘機が一機六万五千円だったといいますから、四千六百機も生産出来たことになります。

「大和」の完成は、日米開戦八日後の昭和十六年十二月十六日でした。ところがこの「不沈」を誇った巨大戦艦は、完成と共に山本の予言通り時代遅れのものになってしまったのです。それも皮肉なことに、山本立案の機動部隊によるハワイ真珠湾攻撃の成功が、海の戦いのやり方を根底から引っ繰り返してしまいました。

航空力優位はすぐミッドウェー海戦でも実証されましたし、太平洋での全ての戦いは、戦艦ではなく、空母であり、航空機になっていったのです。アメリカの最新鋭戦艦は四十㌢砲九門のノース・カロライナでしたが、もし洋上で雌雄を決していたら、間違いなく「大和」に軍配が挙がっていたでしょう。しかし「大和」が戦った相手は全部航空機、その爆弾と魚雷でした。せっかくの四十六㌢砲も、米英の戦艦と相撃つ砲戦の機会は一回もなく、わずかに十九年十月の「比島沖海戦」、アメリカ側では「レイテ沖海戦」と言っていますが、護衛空母群と遭遇したのが唯一の発砲記録です。駆逐艦一隻を撃沈し、一隻を大破させたと言われますが、これが「大和」が敵艦隊に向けて主砲を放った最初であり、最後だったのです。

「大和」の沖縄出撃は、慌ただしく決まりました。小磯内閣が総辞職した四月五日の朝、慶応日吉の連合艦隊司令部地下壕では定例の作戦会議が開かれていました。連合艦隊は、翌日六日から沖縄の米軍に対する航空総攻撃、「菊水一号作戦」の発動を決定していましたが、先任参謀の神重徳大佐がパッと立ち上がって、こう言うのです。「第二艦隊はあす、菊水一号作戦に参加します。旗艦『大和』は巡洋艦『矢矧』、駆逐艦八隻と共に出撃、沖縄沖のアメリカ艦隊と輸送船を攻撃します。主砲をもって敵に最大限の打撃を与えたのち、『大和』は海岸に乗り上げ、乗員は上陸して守備隊を増援します」。参謀たちが驚いて、長官の豊田副武大将の方を見ると、豊田も重々しく頷きます。豊田には、前夜のうちに了解を取り付けていたのです。燃料担当の参謀が燃料状況を調べる許可を求めると、神は「そんな必要はない。第二艦隊は海上特攻隊という名前に変わる。特攻作戦だから、燃料は片道分で十分だ」と言うのです。

神は海軍省の課長時代、東条暗殺を計画したほど、何事にも積極論者。神が連合艦隊に転出し、東条内閣も総辞職したため暗殺計画は不発に終わりましたが、「大和」が瀬戸内海でむざむざ敵の空襲に潰え去ってもいいのか、特攻を航空機だけに任せておいてもいいのか、「大和」に悔いなき死に場所を与え、最後の花道を飾らせてやるべきだ、と主張していました。しかし、連合艦隊参謀長の草鹿龍之助中将は反対でした。「世界最強の戦艦として、時と場所を与えてやらねばならぬ。成算もなしに投入出来ない」と言っていましたが、「菊水一号作戦」指導のため九州鹿屋の第五航空艦隊司令部に出張中で、言わば草鹿不在を狙って決定されたのです。神から電話がかかってきて、「長官も決済されたが、参謀長の意見は如何ですか」。草鹿は「決済をとってから、意見もないじゃないか」と怒りましたが、後の祭りです。あげくは「鹿屋は近いから、第二艦隊へ行って出撃命令を伝えてほしい」と、引導役まで押しつけられました。

第二艦隊と言うと、第一艦隊があると思われるかも知れませんが、第一艦隊はすでに解散してなく、第二艦隊だけが艦隊らしい唯一の艦隊でした。長官の伊藤整一中将は、軍令部次長を三年四ヵ月務めた後、前年十二月に就任したばかり。

幾多の作戦に決死の出撃を命じてきた伊藤としては、死に場所を求めたのだと言ってもいいでしょう。草鹿は、鹿屋から瀬戸内海三田尻泊地の「大和」に飛んで、伊藤に作戦計画を説明しましたが、「作戦の基本に腑に落ちぬところがある」と、容易には応じません。「七千の将兵を死なせる以上、連合艦隊は我々に何をやらせたいのか」と言うのです。草鹿も伊藤の決意を見てとって、「要するに死んで貰いたい。いずれ一億総特攻ということになるのであるから、その模範となるよう、立派に死んで貰いたいのだ」。肚のうちを明かすと、伊藤は即座に「それなら何をか言わんや、よく了解した」と、命令を受け入れたそうです。しかし、途中で艦隊の大半を失い、作戦目的を達成出来ないことが確実となっては、部下を犬死にさせるだけです。指揮官として、作戦変更を決断しなければなりません。伊藤がこの点を質すと、草鹿は「一意、敵撃滅に邁進するとき、それは自ずから決まることで、一に長官たる貴方の心にあることだ」。つまり「長官判断で行動して差し支えない」と答えると、伊藤は「有難う、安心してくれ、気も晴れ晴れした」とニッコリしたといいます。草鹿は「戦争はいろいろと苦しいことがあったが、この時ほど苦しい思いをしたことはない」と、回想しています。

「大和」には十人の艦長が集められ、草鹿が連合艦隊の公式命令を伝えました。「燃料は片道分しか配給できない。すなわち、帰還の道なき特攻作戦であることを覚悟すること」。そして豊田の「皇国ノ興廃ハ正ニ此ノ一挙ニ在リ」の長官訓示を読み上げると、しばらく沈黙がありました。やがて、若手の駆逐艦長が「連合艦隊最後の作戦だと言われるなら、なぜ参謀長は日吉の防空壕を出て、自ら特攻攻撃の陣頭指揮をとられないのか」。こう口火を切ると、駆逐艦長から次々と反対の声が出たのです。「生死はもとより問題ではないが、絶対戦果を期待し得ない自殺作戦には反対だ」、「駆逐艦一隻といえども貴重な存在だ。無為に沈んでたまるか」。それを収めたのは、伊藤の万感をこめた簡潔な一語、「我々は死に場所を与えられたのだ」。この言葉でした。

「大和」には兵学校、機関学校、経理学校を卒業したばかりの少尉候補生五十三人が、三日前から乗艦して実習訓練中でした。艦長の有賀幸作大佐は、伊藤と相談して全員に退艦を命じたのです。「大和乗組みは皆の長い間の念願だったと思う。しかし熟慮の結果、今回の出撃には加えないことにした。沖縄には我々が行く。君たちには、残ってやって貰いたいことがある。第二、第三の大和が待っているだろう。それに備えてよく錬磨し、立派な戦力になって貰いたい。では、ご機嫌よう」。「ご機嫌よう」というのは、実にいい日本語ですね。私の中学の先生で、一生の師とも言ううべき方のお宅に伺うと、帰りはいつも「ご機嫌よう」でした。戦争中の海軍で、この言葉が使われていたのを知って、つい嬉しくなるのですが、何よりも若い候補生たちの将来に対する配慮がありました。候補生は「覚悟は出来ている」と懇願しましたが、副長の能村次郎大佐が「出て行く我々が国

のためなら、残る皆もまた国のためなのだ」。こう諭すと、候補生は泣きながら病人十人、呉で補充された老兵十人と「大和」を下りていったのです。巡洋艦「矢矧」でも、候補生二十二人が病人十五人と退艦していきました。

一見、冷酷非情ともとれる特攻作戦ですが、将来に対する配慮もあったし、人の情けもあったのです。実は燃料も、命令が片道分となっていますから、公式には二千トンとなっていますし、またそう書いている本も多いのですが、実際は往復分の燃料が積み込まれていました。連合艦隊機関参謀の小林儀作大佐は、「たとえ生還のほとんど見込みのない特攻攻撃であっても、万一作戦中止となった時、帰っても来れないというのは、武人の情として忍びがたい」。そう考えて、呉鎮守府軍需部長の島田藤治少将に相談したのです。容量三百万トンの山口県徳山燃料廠の巨大な石油タンク群は、ほとんどカラッポでしたが、底の膨らみの部分に特殊なポンプでないと吸い上げられない油が、かなりあることがわかりました。海軍では、これを「帳簿外」と言うんだそうですが、大急ぎで掻き集めて「大和」に四千トン、満載搭載量が六千三百トンですから十分とは言えないまでも、とにかく往復分。巡洋艦「矢矧」と八隻の駆逐艦は満載にして、六日午後三時二十分、徳山沖から出撃したのです。

艦長の有賀は四十七歳。同期生がみんな少将になっている中で、最古参の大佐でした。駆逐艦長や駆逐隊司令の経歴が長く、普通は海兵トップがなる「大和」艦長になったのは四ヵ月前。豊富な実戦経験を買われての、異例な起用でした。伊藤は、戦闘指揮の一切を有賀に任せ、艦橋の長官用の椅子に座ったまま身じろぎもしません。七日昼頃、沖縄への半ばに到達し、「午前中はどうやら無事ですんだな」。初めて一言洩らしましたが、午後零時三十五分、第一波二百六十機が殺到し、四次にわたり延べ三百九十機の攻撃が始まったのです。

四十六㌢砲には対空用に「三式弾」と言って、これは砲弾一発に一万発の機銃弾が詰まっていて、炸裂すると四百㍍の火の箒になりますから、密集してやって来る敵機には大きな効果がありました。主砲を撃つ時はブザーが鳴って、甲板にいる者は退避、高角砲や機銃配置の者も鉄板の蔽いに隠れます。そうしないと、爆風で吹き飛ばされるからですが、この日は雲が低くて、低空でやって来る敵機を遠距離で捉えられません。つまり、「三式弾」発射のチャンスがなかったわけで、高角砲、機銃対応になり、能村副長は「主砲射撃は三発だけだった」と話しています。魚雷は左舷に集中しました。左舷に十一本、右舷に一本。大型爆弾も七個命中して、「大和」は左舷に大きく傾きます。緊急注水して、復元しようとしても戻りません。有賀は、航海長に「艦を北向きに持って行け」と命じました。臨終の時、北枕にして寝かせる習慣にならったのですが、午後二時十五分には「総員最上甲板」の艦長命令が出ました。艦を放棄し、乗員が駆逐艦に移りやすいよう、最上甲板に上げる措置です。

東大在学中に学徒出陣をした吉田満少尉は、「戦艦大和ノ最期」に、伊藤長官の姿をこう書いています。「参謀長、左手ヲ羅針儀ニ支ヘツツニジリ寄ッテ、長官ニ挙手ノ礼　永キ沈黙　長官礼ヲ返シ、互ヒノ眸ヲ射ル…長官、挙手ノ答礼ノママ、静カニ左右ヲ顧ミ、生キ残リノ士官一人一人ノ眸ヲ捉フ…長身ノ身ヲ翻シテ、艦橋直下ノ長官私室ヘ「ラッタル」ヲ歩ミ去ル　開戦以来、一切ニ無縁、微動ダニセザリシ長官ノ、我ラガ眼前ニ演ジタル行動ハ、スナハチ以上ニ尽ク　ソノ後沈没マデ、長官私室ノ扉開カレズ　マタ絶エ間ナキ破壊音ノ故カ、自決ノ銃声ヲ聞カズ　携帯拳銃ヲ撫シツツ、身ヲモッテ艦ノ終焉ヲ味ハレタルカ　第二艦隊司令長官伊藤整一中将、御最期ナリ　艦隊ハココニ首上ヲ失ヒ、ヤガテマタ主城ヲ失ハントス」

有賀が防空指揮所で「俺は艦もろとも行く。若い君たちは泳げ、退艦を急げ」。大声で怒鳴りながら、羅針儀に体を三か所縛り付けると、一人の水兵が食べ残しの乾パンを四枚渡しました。ニヤッと受け取った有賀が、二枚目を口にした時です。突然、もの凄い轟音と真っ赤な閃光。「大和」が大きく左側に傾いて転覆したため、弾薬庫の主砲弾数百発が激突発火し、誘爆して瞬時に轟沈したのです。午後二時二十三分、爆煙は高さ二千㍍に達し、九州からも見えたと言われますが、沖縄を遠く隔たる四百三十㌔の地点でした。五、六百人が海に飛び込んだものの艦もろとも巻き込まれ、助かったのは乗員三千三百三十二人のうち二百六十九人です。護衛部隊も「矢矧」と四隻の駆逐艦が撃沈され、千百八十七人が命を落としました。連合艦隊司令部は午後四時二十九分、突入作戦の中止命令を出しましたが、米軍の損害は航空機十機、戦死十二人だったと言われます。

この巨大戦艦「大和」の建造と、その運命ほど、「艦隊決戦・大艦巨砲主義」に取り憑かれた、日本海軍の思想的画一化を象徴し、また、その失敗を際立たせたものはなかった。こう言ってもいいでしょう。吉田少尉は「戦艦大和ノ最期」に、若い士官たちの言葉、「日本ハ進歩トイウコトヲ軽ンジ過ギタ」、「不足ナルハ訓練ニ非ズシテ科学的研究ノ熱意ト能力ナリ」。こう記録していますが、本当にその通りでした。

最後の連合艦隊長官になった小沢治三郎中将は、日本の敗北が確定的になった七月三十日、第二艦隊の殊勲を長官名で全軍に布告しています。連合艦隊が軍令部に作戦の認可を求めてきた時、当時軍令部次長だった小沢は、何とか無謀な作戦をやめさせたいと思って、「片道燃料」の条件を出しました。しかし、連合艦隊の方は最初からその予定なのですから、「あくまで強行」となってしまったのです。小沢は「大和の沖縄特攻は、自分に一番責任がある」と言い続けていたそうですが、その小沢の思いがこめられた連合艦隊告示でした。「大和」艦長有賀大佐もこの日、中将に二階級特進しています。

伊藤整一は五十四歳。山本五十六の「日米戦うべからず」を、最も肝に銘じて

いた一人でした。山本との縁は深く、海軍大学校で教えを受け、山本が霞が浦航空隊副長になると、直属の部下になっています。そして昭和二年五月、少佐でアメリカ駐在を命じられた時、駐在武官が山本でした。山本から「可能な限り幅の広い勉強をし、旅行をして自分の目で見て歩け。日本人のいない所で英語に徹する生活をしろ」。こう言われてエール大学の寄宿舎に入り、留学生生活を始めたのです。山本がどれほど伊藤を買っていたか。山本が次官時代、その下で人事局長、連合艦隊長官になると参謀長を務めています。軍令部次長になったのは昭和十六年九月ですが、少将でこのポストに付いたのは、大正、昭和の海軍で三人しかいません。

奇縁と言えば、沖縄攻略軍司令官スプルーアンス大将とも、極めて親しい仲だったのです。伊藤が昭和二年の暮れ、ワシントン駐在武官補佐官になった時、スプルーアンスは海軍省の情報課長補佐。職務が同じ情報活動だったことから、家族ぐるみの付き合いをしています。伊藤が、日本に残してきた長女に何かプレゼントをと探していると、マーガレット夫人は青い目のアメリカ人形を見繕ってやっています。それから二十年近い年月を経て、お互いに敵将が誰かを知っていたでしょうし、どんな思いで戦ったのでしょうか。

伊藤は最初の夫人をお産で亡くし、十二歳年下のちとせ夫人とは再婚でした。出撃命令を受けた四月五日、別れの手紙を書いていますが、実にいい手紙です。二十三年間の結婚生活が幸せに満ちていたことに感謝し、自分が最後まで喜んでいたことを伝えることによって、当時四十二歳の妻の余生の淋しさが幾分でも和らげられたらと、願っているのです。手紙は「心から心からお前様の幸福を祈りつつ いとしき 最愛のちとせどの」と結ばれていました。アメリカ生活のせいもあったでしょうが、あの時代、「いとしき 最愛の」に、伊藤の思いが全てこめられているように思います。アメリカ人形を贈った長女はすでに嫁いでいましたが、十五歳と十三歳のお嬢さんには「大きくなったら、お母さんの様な婦人になりなさいというのが、私の最後の教訓です」と書いています。

しかし、伊藤の期待は叶わずに終わりました。まず一人息子の叡中尉が、伊藤の三週間後に戦死したのです。叡は海兵七十二期、戦闘機のパイロットとして九州出水基地に配属になっていましたが、「大和」出撃の六日、直掩戦闘機十五機の一機として艦隊前方で哨戒に当たっています。息子に、せめて父親の艦隊を守らせてやろうとの配慮でしたが、七日の日の出間もなく敵大編隊と遭遇、「無用の犠牲は避ける」との基地の方針で、交戦せずに基地に引き返しました。ところが二十八日、特攻隊の掩護に当たっていた叡の戦闘機は、伊江島上空で「空戦に入る」との無電を打ったまま消息を断ったのです。二十一歳でした。そして、ちとせ夫人もまた、戦後一年余りで病に倒れ、娘さんたちを残して伊藤の許へと旅立ったのです。

×　　×

「鈴木貫太郎自伝」の巻頭に収められた十数枚の写真の中に、鈴木がカードの独り占いを楽しみながら、たか夫人に煙草の火をつけてもらっている。こんな微笑ましい、老夫婦の写真があります。山本五十六もそうでしたが、トランプを楽しんだのは、軍艦で航海をする海軍生活のせいでしょう。鈴木の長男一は、「あれほど正直の徳を讃え、自身も嘘をつけない性格であるのに、あくまで戦うのだと云う顔をして敵を欺し、国民を欺し通してきた結果となったと云うのは、如何にも皮肉である」。こんなことを書いていますが、ブリッジやポーカーの勝負手としてのブラフ、脅しのテクニックもうまかったようで、四月七日に成立した鈴木内閣は、一言でいえば、終戦へ向けての「ポーカー・フェース内閣」だったと思うのです。

鈴木は組閣を終えた時の心境を、戦後口述した「終戦の表情」に語っています。鈴木の気持ちがよく分かりますので、そのまま紹介しますと、「官邸の居間に落ちついて、窓外のサクラの満開に何気なく目を落した。『サクラの散りぎわの如く潔く』というのが日本の武人の心構えであり、国民の心情である。だが余は、ふと考えざるを得なかった。悠久の大義に生きるとは、何を意味するのであろうか。国家そのものが滅亡して、果して日本の義は残るのであろうか。生命体としての国家の悠久を万世に生かすとは、国家が死滅して、果して残し得るものであろうか。ローマは亡びた。カルタゴも亡びた。カルタゴなどは歴史的にその勇気をうたわれているが、その勇武なる民はいまいずこにあるだろう。一塊の土と化しているに過ぎないではないか。余はこのまま戦争を継続して行けば、日本の滅亡は誠に明らかであると常々考えていた。余の決意の中心となったものは、陛下の思召しが奈辺にあるか、身を以て感得した所を、政治上の原理として発露させて行こうと決意したのである。所で、陛下の思召しは如何なる所であったろうか。それはただ一言にしていえば、すみやかに大局の決した戦争を終結し、国民大衆に無用の苦しみを与えることなく、又、彼我ともこれ以上の犠牲を出すことなきよう、和の機会をつかむべし、との思召しと拝された。もちろんこの思召しを直接、陛下が口にされたのでないことはいうまでもないことであるが、それは陛下の余に対する以心伝心として自ら確信した所である。だがこの内なる確信は、当時としては深く内に秘め、だれにも語り得べくもなく、余の最も苦悩せるところであった」

確かに、その通りでした。戦後の首相吉田茂はこの直後、四月十五日に和平運動画策者として憲兵隊に逮捕されますし、作家の高見順も「いつどんなことから家宅捜索され、日記が材料になっても困る。嗚呼！この日記も気をつけないといけない」と書いています。和平は、まだまだ口に出せなかった時でした。

内大臣の木戸幸一は、「鈴木内閣の誕生は天の助け」と言っていますが、鈴木自

身も実に運のいい人だったのです。昭和に入ってから敗戦までの十五人の首相のうち、七人までが非業の死を遂げています。浜口雄幸、犬養毅、斎藤實が暗殺され、近衛は自殺、東条、広田が東京裁判で絞首刑になり、小磯も無期禁固の判決を受け獄中で病死しています。そんな中で、鈴木は終戦を達成し、八十歳の天寿を全うしたのですから、つくづく「運が強かった」と思わざるをを得ません。しかも、鈴木は何度も非常時にぶつかり、何度も死の場面に直面しながらも、切り抜けているのです。

生まれたのが慶応三年十二月、鳥羽・伏見の戦いの起きた日でした。父親が千葉関宿の五万八千石の大名久世家の飛び地、大阪久世村の代官をしていて、その陣屋で生まれたのですが、お七夜には大阪城の火薬庫に火が入って大爆発、振動で障子が外れたほどだったそうです。よちよち歩きの一歳ちょっとで江戸へ下る途中、島田の宿場で街道に走り出て馬の蹄の前に転びましたが、馬の方が飛び越してくれました。日清戦争では、わずか五十トンの水雷艇で威海衛の清国艦隊に夜襲をかけ、集中砲火を浴びながら、防材に爆薬を仕掛けて爆破し、「鬼貫太郎」の勇名を馳せました。戦争が終わって練習艦「金剛」が鳥羽に停泊中、砲座で涼みながら転寝をしていて、目が覚めた時に思わず大砲に頭をぶつけて海に転落。強い潮に流され、やっとのことで艦に泳ぎ着き、鎖を伝ってはい上がることが出来ました。日露戦争では、巡洋艦「春日」の副長で、旅順港外で巡洋艦「吉野」と衝突、「吉野」は沈没しましたが、「春日」は助かりました。また駆逐隊司令として旅順港を哨戒中、明け方、仮眠していて炭火で一酸化炭素中毒になり、一時意識不明になっています。日本海海戦では、駆逐艦で敵の旗艦「スワロフ」に水雷攻撃をやり、夜襲も決行しています。

そして、何といっても侍従長時代の二・二六事件です。明け方、熟睡中に女中さんに「兵隊が来ました」と起こされ、直観的に「来たな」と思って、何か防御になるものはと探しましたが見当たりません。銃剣をつけた兵隊二、三十人に囲まれ、「どういうことか、理由を聞かせて貰いたい」と言っても黙っています。そのうち下士官が「時間がありませんから撃ちます」、「それなら止むを得ません。お撃ちなさい」と、一間ばかり離れた所に不動の姿勢で立ったというのです。とたんに発射され、心臓付近に四発当たって倒れました。「止め、止め」と連呼する中で、たか夫人が「止めはどうかやめて頂きたい」と言うのが、聞こえたそうです。すると指揮官の大尉が入ってきて、「止めはやめろ」と命令し、鈴木に敬礼します。夫人が「誠に残念なことを致しました」と名前を尋ねると、その将校は形を改めて「安藤輝三」とはっきり答え、兵隊を集めて引き揚げて行きました。一面血の海。駆け付けた医師が、滑って転んだほどでしたが、鈴木が奇跡的に九死に一生を得たのは、弾丸がわずかに心臓をそれたこと、血止めをしてすぐ医師を呼んだ夫人の機敏な処置、そして何よりも「止めはやめて頂きたい」の夫人の一言

でした。

実は、たか夫人も昭和天皇とは極めて縁の深い人だったのです。明治三十八年五月、日本海海戦の直前ですが、東京女子高等師範を卒業して付属幼稚園の教師をしている時、当時四歳の昭和天皇、三歳の秩父宮の養育係になっています。昭和天皇は誕生間もなく、その頃の宮中の慣習で、薩摩出身、海軍大将の川村純義の里子として育てられましたが、川村が亡くなりました。東宮侍従長が養育係を探しているところへ、自分の孫が幼稚園でたかの世話になっていて、人柄に惚れ込んでいた東大総長菊池大麓の推薦で、「是非とも」となったのです。たかは献身的に仕え、昭和天皇も母親のように慕われていたと言われますが、大正四年、三十二歳の時に、一男二女を残して夫人を失い、やもめ暮らしをしていた四十八歳の海軍次官鈴木貫太郎に嫁いだのです。鈴木が昭和四年に侍従長になり、その夫人がたかであったことが、天皇の鈴木に対する信頼を倍加させたと言ってもいいでしょう。

鈴木の最後の幸運は、終戦の朝でした。午前四時過ぎ、徹底抗戦派の一隊が首相官邸を襲撃しましたが、鈴木は五月二十五日の空襲で首相公邸が焼失してからは、小石川丸山町の私邸で寝泊りしていました。官邸の交換手が機関銃の銃声で私邸に急報、私邸は間もなくやって来た一隊に焼き払われたものの、鈴木の方は間一髪、脱出できたのです。その官邸と私邸の直通電話も、三日前に開設されたばかりでした。

これだけの死地を、強運で切り抜けてきた鈴木だったからこそ、肚も座っていましたし、また天皇との以心伝心、命懸けで終戦に取り組んだのだと思います。長男の一は、農商省の山林局長でしたが首相秘書官になり、耳の遠い鈴木の「補聴器」として閣議への出席も許されました。一は「暗殺を予想してボデーガードになろう。二・二六事件で母が父をかばったように、今度は息子の私が立ち塞がろう。勅任官から奏任官への格下げだったが、構っちゃいられなかった」と話しています。

鈴木の組閣工作は、陸軍省訪問から始まりました。四月六日、一を連れて杉山陸相を訪ね、陸相として阿南の入閣を要請したのです。何はともあれ「陸軍重視」の姿勢を示した鈴木のチエで、憲兵司令官は「和平内閣ではないか」と疑い、軍務局長に警告していますが、杉山は気をよくしたのか、取り合わなかったといいます。陸軍は組閣に関する要望として、あくまで大東亜戦争を完遂すること、勉めて陸海軍の一体化の実現を期し得る如き内閣を組織すること、本土決戦必勝の為の陸軍の企図する諸施策を具体的に躊躇なく実行すること。この三条件を示しましたが、鈴木はあっさり呑みました。

岡田啓介が組閣本部に行ってみると、電話のかけ方に慣れた人さえいません。驚いて、娘婿の大蔵省銀行保険局長迫水久常を呼んで手伝わせましたが、迫水は

そのまま内閣書記官長に就任します。そして初閣議を終えた七日夜、言わば「戦え、戦え、戦い抜け」という総理大臣談話を発表したのです。「国民一億のすべてが、既往の拘泥を一掃して、ことごとく光栄ある国体防衛の御盾たるべきであります。私はもとより、老躯を国民諸君の最前列に埋める覚悟で国政の処理に当ります。諸君もまた、私の屍を踏み越えてたつの勇猛心をもって新たなる戦力を発揚し、共に宸襟を安んじ奉らんことを希求してやみませぬ」。こんなハッパをかけたものですから、鈴木内閣は本土決戦に臨む「一億玉砕の内閣」として出発したような印象を国民に与えたのです。そして、密かに終戦内閣を期待していた人たちにも、異様としか思えないような内容でした。

徳川夢声は、日記に「聊カ期待外レ。寧ロ平凡デアル。決戦最終内閣ト新聞デ銘ウッテイルガ、コレデ最終ニナレルカドウカ」。こう書いていますし、情報通の東大教授富塚清でさえ、「ことごとく古顔の老人ばかり、まことに替わりばえがせぬ。これでまた戦争に邁進するというのだが、果してどんなことができるか？」と、疑問を投げかけています。枢密院で顧問官として鈴木と机を並べていた元日銀総裁の深井英五も、「鈴木大将の言説は時として国際親和論に傾くことあり、時として武力進出を主とするものの如くに聞こゆることあり、包容大なるか、定見無きによるかを測るべからず」と、首をひねった一人でした。

辛口の政治外交評論家清沢洌は、「要するに『義理』を各方面に果たしたという格好だ。鈴木大将の誠実は疑えず、ただ誠実尽忠だけでは政治は行えぬ。大河が落下せんとして、まだ渦巻いているといった形ちだ。この内閣では何もできぬ。時勢に押されて、適当の時期を待つだけだ」。こう突き放していますが、十二日の日記には「二・二六事件をやった人たちによって起された大東亜戦争を、この人々によって狙われた人たちが収拾しようとしているのである」と、鈴木内閣の特質を鋭く指摘しています。

そして、極めて少数だったとはいえ、すぐ「これは和平内閣だ、終戦内閣だ」と思った人もいたのです。人権派の弁護士で、戦後専修大学の総長をした今村力三郎です。今村は、鈴木と国務相兼情報局総裁として入閣した元朝日新聞副社長の下村宏の名前を見た時、下村は二・二六事件直後の広田内閣で閣僚候補に挙げられながら、陸軍から「自由主義者」として排斥された人ですが、すぐ下村宛てに手紙を書いて期待を訴えています。「此内閣にて平和回復を企図するもの也。以上先見にあらず常識にて苟も新聞に眼を通すものは容易に鈴木内閣の使命を了解すべし」と。

とにかく、肚のうちは一切見せずに外交の大転換、終戦への道を具体化しようというのですから、カギを握るのは当然のことながら外相を誰にするかでした。それだけに、また難航したのです。重光外相の秘書官をしていた加瀬俊一さんの話だと、内閣書記官長の迫水から「東郷はどうだろうか」と、電話がかかってきま

した。加瀬さんと迫水は東条内閣打倒に奔走した仲で、加瀬さんも開戦時の外相東郷茂徳が再び廟堂に立つことを信じて、東郷には入手した情報を細大洩らさず伝えていましたから、さっそく連絡をとりました。

七日夜、軽井沢から上京して来た東郷は、鈴木に単刀直入に和平への決意を質し、「戦争を続けるのか、やめるのか」と、鈴木の一番言いにくいことを迫ったのです。鈴木が「あと二、三年は大丈夫」などととぼけたため、東郷は「これは駄目だ」と返事を保留します。迫水に言わせると、「鈴木は東洋的な肚の人、東郷の方は黒白をはっきりさせないと気の済まない、西欧合理主義のモデルのような人。その違いなんだが、この時点で終戦内閣だなんてハッキリ云えばえらいことになる。そこをわかって貰うのに苦労した」。加瀬さんも岡田啓介も説得しましたし、九日には内大臣秘書官長の松平康昌が木戸内大臣の意向を受けて、天皇の意思が「和平」にあることを伝えました。そして鈴木が、東郷の戦争に対する見通し、「戦争は今後一年続けることも困難」。これをを認め、「外交は任せる」と保証したため、東郷も九日夜、やっと外相就任を承諾したのです。

ところで鈴木首相は、アメリカに対してどんな「和平」の合図を送っていたのでしょうか。私の大好きな本に、東大で比較文学の教授をした平川祐弘さんの「平和の海と戦いの海」があります。前書きに「平和のために身命を賭した人々を忘れたくないと思った」とあり、その一人として鈴木を挙げていますが、鈴木は四月十二日にルーズベルト大統領が急死すると、すぐ意味深長な挨拶をアメリカ国民に送っているのです。平川さんによると、ニューヨーク・タイムズは十五日付の三面トップで、「JAPANESE PREMIER VOICES "SYMPATHY"、日本の首相『弔慰』を表す」と報じています。もちろん日本の新聞には一行も出ていませんが、海外向けで軍部検閲のない同盟通信を通じて打電されたもので、鈴木が同盟の記者に「アメリカ側が今日、優勢であるについては、ルーズベルト大統領の指導力が非情に有効であって、それが原因であったことは認めなければならない」。そして、こう付け加えたというのです。「であるから私は、ルーズベルト大統領の逝去が、アメリカ国民にとって非常なる損失であることがよく理解できる。ここに、私の深甚なる弔慰を米国民に表明する次第です」

日本国内は、「米英撃滅」一本槍の時です。ほとんどの新聞は「天誅だ」と書きましたし、ドイツのヒットラーも「運命は歴史上最大の戦争犯罪人ルーズベルトを、この地上より遠ざけた」と声明しました。そんな中で、平川さんは「和平への政治的配慮を秘めた第一声、手探りにも似た最初のサインだったと思われ、それはグルーには確実に届いたようだ」と書いています。グルーは開戦まで駐日大使を務め、二・二六事件前夜も侍従長の鈴木を大使館主催のアメリカ映画鑑賞会に招待していましたが、前年の昭和十九年年末に国務次官にカムバックしていました。

そしてアメリカ国内の反応は、まずアメリカに亡命していたドイツ人作家トーマス・マンの、ドイツ国民向け放送となって表われたのです。鈴木の武人としてのたしなみ、人間としての品位が、トーマス・マンの心を大きく揺さ振ったのでしょう。四月十九日、鈴木の弔慰に触れて、こう放送したのです。「これは私たちアメリカにいる者にとっても、意外な、驚くべきことでありました。日本はいまアメリカと生死を賭けた戦争をしています。野心的な封建的な一群の指導者が日本をこの戦争に引きずり込んだのです。だがナチスの国家主義者が、わがみじめなるドイツ国においてもたらしたと同じような道徳的破壊と道徳的麻痺が、軍国主義の日本で生じたわけではなかった。あの東洋の国日本は、いまなお騎士道精神と人間の品位に対する感覚が存する。いまなお、死に対する畏敬の念と偉大なものに対する畏敬の念とが存する。これが日独両国の差異である。かって世界で最も教養ある国民と自負したドイツ人が、いまルーズベルト大統領の死に際して、どのように振舞うかを見ると、つくづくドイツのみじめさが身にしみて感ぜられます」。東条が首相だったら、何と言っていたでしょうか。あの戦争中、しかもどん底の中で、こうした首相がいたことは、やはり日本人として大いに誇りにしていいことだと思います。

鈴木首相の終戦工作の難しさは、何といっても、陸軍の認めない終戦は終戦にならないことでした。連合国はカサブランカ会議、カイロ宣言で、日本に対して再三無条件降伏を要求しています。無条件降伏というのは、白紙委任状を出しての降伏ですから、天皇制が否定されようと、どんな戦後処理を押しつけられようと、文句は言えません。それくらいなら、むしろ「一億玉砕の道を選んだ方が潔い」という声も出てきます。仮に講和が成立したとしても、軍部が反乱を起こして国内が混乱すれば、連合軍の攻撃が再開され、収拾しがたい最悪の事態を招く恐れもあったです。

しかも、鈴木に大命が下った四月五日、ソ連は「日ソ中立条約を延長しない」と通告してきました。佐藤尚武大使の話だと、一通の文書で届けてきたんだそうです。ヤルタ会談でドイツ降伏後の対日参戦を決めておきながら、佐藤にはぬけぬけと、「ソ連の日本に対する方針には何の変更もない」と言っていたモロトフ外相です。さすがに、面と向かっては言いにくかったのでしょう。佐藤が「失礼な」と思って面会を申し込んでも、忙しいとか言って面会できたのは数日後。「条約はなお一年間は有効だ」。こう念を押すと、渋々「その通り」と言っただけだったそうです。加瀬俊一さんは、「この通告は、新内閣の外交的展望を著しく陰惨たらしめるものであった」と言っています。敵対的な姿勢を見せてきたソ連の参戦は、何とか防ぎたい。そして、無条件降伏だけは何としても避けたい。この気持ちが、対日参戦を決めているソ連に、和平の仲介を依頼するという幻想を生むことになるのです。

東郷外相が動いたのは四月二十日でした。ソ連のマリク大使に、モロトフが二十五日にサンフランシスコで開かれる国連創設会議に出席した際、「帰国ルートがシベリア経由になるなら連絡してほしい」。こう要請して、モロトフとの会談を希望したのですが、大西洋ルートでした。そこへ二十二日、参謀次長の河辺虎四郎中将が東郷を訪ねて来たのです。「大本営機密日誌」は、「ソ連軍、極東の動き急」として、チタ領事館員の視察情報をこう記録しています。「ソ連は極東に狙撃師団及び相当数の飛行機、戦車の輸送を開始していることが明らかになって来た。ソ連の対日参戦の肚が決って来たものとして、その時の判断及び対応措置の確定が急速に必要となって来た」。河辺は、東郷がドイツ大使の時に駐在武官をして旧知の間柄でしたが、こうした極東情勢を説明し、「東郷一生一代の大仕事として、対ソ工作を大胆にやってほしい」と力説したのです。そして「事は秘密を要する。最小限の閣僚と両総長だけで進めたらどうか」と提案し、「軍部内に関する限り、自分は全力で外相を支持するし、陸軍にも大いに支援させるよう努めます」と約束します。

対ソ工作というのは、とりも直さず終戦工作のことですから、陸軍が非公式とはいえ、終戦工作を提案してきたのは初めてのことでした。東郷は直ちに行動を起したのです。時間的余裕もないし、特に妙案もないとすれば、この陸軍提案を利用して、そこにチャンスを求める。最終の狙いは、終戦そのものにあるのだから、それには陸軍も認めているソ連に仲介を依頼する以外に方法はない。問題討議を極秘のうちに進めないと、戦争継続派に反対され、潰される恐れがあるが、幸い参謀本部も秘密討議を申し入れてきています。東郷は、陸軍の梅津、阿南の了解を取り付けると、最高戦争指導会議を構成員だけ、首相、外相、陸海軍大臣に両総長の六人だけで開くことにしたのです。最高会議はこれまで、陸海軍次官と両次長、必要に応じて関係閣僚、そして幹事役として内閣書記官長と軍務局長が出席するのが慣例になっていました。それを首脳の六人だけにして、終戦工作という根本問題を忌憚なく話し合い、合意形成に持って行く。審議内容は「他言無用、絶対秘密」を申し合わせたのです。

東郷は、「これが、しまいまで非常に役立った」と言っています。東郷に言わせると、それまで最高会議の議題はみんな幹事が準備してきて、説明も幹事がします。幹事の話は当然下にも伝わるし、部下の統制上、余り弱いことは言えません。しかも人数が多いから、どうしても議論が強い方に傾きます。東郷は「外務省幹部にも六月末まで、会議の内容をほとんど知らせなかった」と言っていますが、書記官長の迫水も、陸海軍の軍務局長から「どんな話をしているのか」と探りを入れられ、困ったそうです。軍令部総長は途中から及川に代わって連合艦隊長官だった豊田が就任していましたが、次長を呼んで「我々が最近集まっていろいろ話しておるのは、全く、軍令部総長として豊田一個の責任においてやっている

ことなのであって、その内容は言えない。また質問もするな」と、強く言い渡しています。

この間、四月二十七日にイタリアのムッソリーニがパルチザンに捕まり、翌日銃殺されました。六十一歳でした。そしてヒットラーも三十日、ベルリンの地下壕で五十六歳で自殺し、五月七日にはドイツが無条件降伏します。「大本営機密日誌」は、「これで日本は全世界を相手にして一国で戦争しなければならない。しかも戦勢は日一日として不利となっていく。この時に当って、鈴木老宰相は何を考えているのだろうか…。和戦を決する最高方策は決しようとしても決し得ないものもある。事を決してもなお言い得ないものもある。この辺の呼吸は誰が知ろう」。こう書いていますが、ドイツの無条件降伏という悪い前例が眼前に発生したのです。それも事前に何の停戦交渉もなく、いわばドイツ全滅という形で、なし崩しに降伏となったものでした。これが無条件降伏に対するアレルギーと共に、ドイツ降伏後、ソ連と米英の利害が対立し、ソ連が日本に好意的な斡旋をしてくれるかも知れない。そういった、希望的観測を生むことになったのは否めません。

最高戦争指導会議が、六人の首脳だけで開かれたのは五月十一日でした。まず発言したのは梅津参謀総長です。ソ連の極東への兵力移動を説明し、「太平洋と満州との両作戦正面に対して、万全の備えをすることは出来ない。従って外交によって、ソ連の参戦を防ぐことが絶対必要だ」。「ソ連から石油を供給して貰ったらどうか」といった意見も出ましたが、東郷はいい機会だと思って、「日本の戦況が悪化している今日、ソ連に日本に対して好意ある態度をとらせることは、最早望みがないから、日本としては寧ろ、戦争終結の努力を始めるべきだ」。こう言って、議論を戦争終結の方向へ持っていったのです。

すると、鈴木首相が口をはさみました。「ソ連にはもう時機遅れとなっているかも知れないが、だからと言って、ソ連に対して何ら外交の手を打たないというのも面白くない。何か、やってみようではありませんか。そして外務大臣の言う通りだとすれば、和平の仲介でも頼んでみたらどうですか」。陸軍の梅津、阿南はまだ戦争継続派でしたが、無条件降伏を避けるには、それしかないことは分かっていたのでしょう。誰からも異議はなく、東郷はすかさず「それでは今までの話を総合すると、次のようになりますね」と、全員の意思を確認したのです。第一、ソ連の参戦を防止する。第二、出来得ればソ連の中立をして日本に好意あるものにさせる。第三、ひいてはソ連をして米英と日本との平和を斡旋させる。

こうして最高会議は、初めて終戦を志向する話し合いに入ることが出来たのです。外務省で編纂した「終戦史録」は、「本会議開催の日本終戦史上における意義は極めて大なりというべきである」と書いています。会議は日曜日はさんで十二日、十四日と続けられ、対ソ交渉の代表を元首相の広田弘毅とすることが決ま

り、ソ連に代償として何を与えるかの話し合いに入りました。南樺太の返還、北満鉄道、内蒙古、場合によっては千島列島の北半分を放棄することで、大体の合意が出来ましたが、ここで阿南陸相が発言します。「日本はまだ広大な敵の領土を占領している。敵はまだ、日本領土のうち極めて一部に足をかけたのに過ぎないのだから、米英との和平条件を議するには、この現実を基礎として考慮する必要がある」。東郷が驚いて「そのような条件でソ連に仲介を頼むならば、交渉は不成立に終わる外はない。陸軍大臣は、日本は現状に於て寧ろ勝っていると主張するけれども、そんな主張はこの交渉では通用しない」。強く反駁したため険悪な空気になりましたが、海軍大臣の米内が「この話はしばらく触れないことにしよう」と遮りました。議論が紛糾して、それまでの成果がフイになってしまうことを恐れたのですが、日本政府の終戦工作は「ソ連の仲介」一本槍になっていくのです。

私たちは、ソ連が臆面もなく日ソ中立条約を破って、満州に攻め込んできたことを知っています。ですから、そのソ連に和平の仲介を頼んだことは、愚策以外の何ものでもなかった。こういう感じが強くするのですが、東郷はこうした見方に反論しています。「日本の降伏決行は、あの時機を失してしまったならば、由々しいことになったに違いないが、あの時機に、あの程度の小さな混乱だけで、それを決行し得たのは、終戦についての原則的了解が六人の間に成立していたからだと言い得ると思う。即ち五月中旬にあの合意を取り付けてあったということは、八月になって、降伏ということをを私どもが持ち出した際、陸軍をして、終戦そのものに対して、根本的な反対をなさしめずに済んだ大きな原因の一つになったと信ずる」。戦後、米国戦略爆撃調査団の質問に答えたものですが、その通りだったかも知れません。

実は、新大統領になったトルーマンは、ドイツが降伏直後の五月八日、世界に向けて微妙なラジオ放送をしているのです。「日本の陸海軍が無条件降伏するまで戦う」と決意を述べたのですが、それはルーズベルトが主張していた「日本の無条件降伏」ではなく、「日本の陸海軍」と変わっていました。そして「日本を今日の破滅の瀬戸際に追い込んだ軍国主義者の一掃を図るが、それは、日本国民の絶滅ないしは奴隷化を意図するものではない」とも語っているのです。しかも日本にとって気になる国体、天皇制については一言も触れていません。そこには、国務次官になったグルーの意向が働いていたのでしょうが、これを根拠に対米交渉をすべきだったのではないか。こういった意見がありますが、果たしてその微妙な変化に賭けることが出来たのかどうか。阿南陸相の発言を見ると、まだまだあの段階では、「本土決戦」を唱えている陸軍を抑えて、そこまで持って行くのは難しかったように思います。

東郷は、こうも言っています。「もし和平の気持ちを政府および統帥部の首脳

部が十分考えないうちに、十分にその頭が練れないうちに、突然、和平の話に持って行くと云うことでは、成立も難しい。そのことを十分に納得してからでないと、結局は非常な騒ぎが起こる。全般的な話し合い、全般的な気持ちを醸成することが極めて大切だったのだ」。日本の終戦工作が、ソ連一本になったことが迷走の度合いを深めたことは確かですし、終戦にはこの後、三ヵ月もかかってしまいます。しかし、東郷の言う通り、あの時機を考えれば、終戦への気運醸成にはやむを得なかった三ヵ月だったのかも知れません。

平川祐弘氏も、鈴木内閣の終戦努力を高く評価しています。「まず念頭に浮ぶのは、第二次大戦におけるドイツの無条件降伏と日本の降伏の違いざまである。ヒットラー暗殺に失敗した一九四四年の七月二十日以後、ドイツは自国民の力で平和を回復する力をついに持ち得なかった。それに対して日本は、その政府部内の自主的努力によって、和平を回復するにいたるのである」。その第一歩が、五月十一日の最高戦争指導会議だったと言ってもいいでしょう。